

若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム(ITP)

バイオインフォマティクスとシステムズバイオロジーの国際連携教育研究プログラム  
ワークショップ参加レポート

Name : 西村 陽介
Title : IBSB2011 への参加報告
Workshop report: <p>私はこの度、ベルリンのフンボルト大学等において開催された "The 11th International Workshop on Bioinformatics and Systems Biology (IBSB 2011)" と Summer School に参加し、IBSBにおいて "Functional analysis of miRNA and its overlapping gene in metazoan genomes" というタイトルでポスター発表を行った。</p> <p>このワークショップは京大、ボストン大学、及び地元ベルリンの大学を中心としてバイオインフォマティクス研究等に関わる学生や若手研究者を主体とする発表と交流の場として毎年開催されている。私は京都において開催された昨年度のワークショップにおいて口頭発表を行ったのに続き今回が二度目の参加となり、昨年交流を持ったベルリンやボストンの学生と再会し、話す機会を得ることが出来た。ポスターセッションでは様々な人に質問を受け、自分の研究発表について英語で説明するための良い練習の場となった。幾つかの質問では英語でスムーズに説明できず詰まってしまうところもあったので、研究対象領域が近くない参加者に対しても自分の研究について興味を持ってもらうために端的な説明を行えるよう、十分な訓練を積んでおく必要性を感じた。ワークショップを通して印象深かったのは、特に海外の参加者が発表や議論に関して熱心に取り組んでおり、お互いのコミュニケーションを非常に重視していることであった。質の良い発表や議論を行うために日頃から高い意識を持って準備を行っていることが伺え、大いに刺激された。</p> <p>IBSBに続けて開催された Summer School "Computational Systems Biology" では2日間に渡ってバイオインフォマティクスやシステムズバイオロジーの講義とコンピュータ演習を受講した。私にとって今までにあまり馴染みのないシステムズバイオロジーの講義は初学者にもわかりやすいように工夫されており、興味深いものであった。また、日本人では馬見塚拓先生と私の所属する金久・五斗研究室のOBであるドイツ在住の山田拓司博士の講義を聞くことが出来た。この Summer School においても講義途中で参加者たちの質問が次々飛び交い、コミュニケーションへの意識の高さが肌で感じられ、今回のワークショップ参加を通じて私の今後の研究生活において説明や議論により重きを置いていくべきだと実感する機会を得ることが出来た。</p>